

## 平成 31 年度入学試験問題

### 一般選抜前期日程

# 小 論 文

## 「論述（長文理解）」

### 注 意

1. 指示があるまで、手を触れないこと。
2. 指示に従って、解答用紙に受験番号（算用数字）および氏名をはっきりと記入すること。
3. 解答は、解答用紙の指定された箇所に、横書きで記入すること。
4. 問題冊子は 4 ページ、解答用紙は 1 枚である。もし、問題冊子の落丁、乱丁および解答用紙の汚れなどがあれば、ただちに申し出ること。
5. 問題冊子は持ち帰ること。

## 問題 (150 点)

次の文章を読んで、設問に答えなさい。なお、本課題文の直前で筆者は、「ウェブ 2.0」の登場により、多様な意見、多様な利害をもつ人びとが主体的に議論することができ(注1)るようになったことから、「アマチュアの知」の活用の仕方について考え、「知」や「情報」といった概念を根本から問い直さなければならない、と述べている。

本来、意味とか価値とかは、客観的なものではなく、主観的な存在である。たとえば、私にとって面白くてたまらない小説や映画も、趣味のちがう友人にとっては退屈でまったく値打ちがない、といったことはよくある。われわれは皆、それぞれ主観的な世界に住んでおり、そのなかで各自、世界の諸事物を意味づけたり価値づけたりしながら生きているのだ。そして死とともにその世界は消滅してしまう。これは人間だけでなくいかなる生命体にも同様の大原則で、イヌやネコも、さらにハエやゴキブリなどさまざまな生物も、各自の主観世界のなかで生きている。だから、この地上に存在するのは唯一の客観世界ではない。むしろ個別の主観世界の集合なのだ。

だがそれなら、(1) いわゆる客観世界はいかにして出現したのだろうか。——ここで言語コミュニケーションによって成立する「間主観性」に注目しなくてはならない。

サルやカラスなど、<sup>ほにゅうるい</sup>哺乳類や鳥類のなかには原始的な信号を交換しているものもあるが、抽象的な言語をもつ生物は人類だけである。個人の主観世界は、赤ん坊のときは生理的で孤立したものに近くても、成長するにつれ、言語を介したコミュニケーションによって周囲の人びととの共通性を高めていく。ミルクがほしいという空腹感  
は他者と共有できないが、やがて片言でほしいお菓子を親に名指しで伝え、親からもらえるようになる。つまり、周囲の人びととの関係をつうじて、意味と価値のある世界を徐々に構成していくわけだ。これが「間主観性（相互主観性）」である。つまり、個々の人間は基本的には孤立した主観世界の住人であっても、そのなかに他者の主観性が導入され、これにもとづいて世界が再解釈される。こういった繰り返しのなかで、間主観性にもとづく「社会」が形づくられていく。

そうすると次第に、本来は主観世界の集まりが存在するだけなのにもかかわらず、あたかも万人共通の唯一の「客観世界」が存在して、個々の人間は客観世界を土台と

した社会に参加しているのだ、という倒立した共同幻想が発生してくる。実際、この共同幻想を共有するほうが、人間同士のコミュニケーションは円滑に進むのである。そして、自立した客観世界と社会は固有の論理的な秩序とルールをもっており、人間はそれに従わなくてはならない、ということになる。

客観世界とそれを土台にした社会という前提の上で、個々の人間やその集団が上手に生きていくための能力の表現が「知」だと言えば、それほど的外れではないだろう。ここで、大きく分けると二つの方向性がうまれてくる。第一は、客観世界を想定するにせよ、それが本来、個々の人間の身体活動と主観世界から抽出されたものである以上、つねにそこに回帰し、個人や人間集団の生命活動の活性化をうながす方向性。そして第二は、客観世界そのものの秩序を分析して、ルールの論理的整合性を高め、社会の機構を自動化して運用効率を高めていく方向性。本書ではとりあえず、前者を「知恵 (wisdom) 指向」、後者を「知識 (knowledge) 指向」と呼ぶことにしたい。

むろん、知恵と知識とをはっきり区別できるとは限らないし、現実には両者が入り交じっている。だが、エコロジーに代表されるように、生命活動の保存発展にたちもどる知と、情報通信テクノロジーに代表されるように、むしろ機械的効率の向上を追求する知とは明らかに質が異なる。この二つの方向性をいかに調整し統合するかが、21 世紀の今日、きわめて重要な問いとなってくるのである。

かつては「知恵指向」の方向性が優勢だった。農耕牧畜が始まる前の先史時代を想像してみればよい。生物学的には人類はおよそ 20 数万年前に誕生したが、狩猟採集生活は非常に長くつづいた。そこではテクノロジーの進歩速度は遅かったものの、種の保存という点では大成功だったと言えるだろう。循環型の社会だったから、たとえば、ある地域の動植物を取り尽くして根絶やしにするといった行為はゆるされない。その後、1 万年ほど前に農耕牧畜社会となり、封建的な王国が成立すると、都市のなかでは「知識指向」の方向性が徐々にはっきりしてくる。とはいえ、社会全体が「知恵指向」から「知識指向」へと大きく舵<sup>かじ</sup>を切ったのは、近代になって科学技術の進歩速度が急に上がってからである。つまりせいぜい 100 ~ 200 年くらい前のことだった。

近代社会になり、商品経済が発達すると、社会の分業化は一挙に進む。もはや一般

の人びとも伝統的な自給自足経済で暮らしているわけではない。たとえ農耕だの漁労だの牧畜だのに従事していても、えられた成果物は自分の家族で消費するというより、むしろ市場に出す商品なのである。こうして職業の細かい専門分化が発生する。近代社会に生きる人びとは、誰しも、何らかの分野の専門家である。理系文系によらず、自分の専門とする分野についてはプロフェッショナルとしての訓練を受け、深い知識をもっており、必要におうじて当該分野の知識の改変や発展にも参加できる。だが、その他のことに関しては、アマチュアのレベルにとどまる以上、素人発言は控えるようになる。

現代社会で権威をもって通用している知の大半は、このような専門知識である。法律知識、医療知識、工学知識などはそれぞれ法律家、医者、エンジニアなどのプロフェッショナルによって担われており、素人がその内容に勝手に口を出すことはできない。一般人にとって、それは天下りの「所与の知」なのだ。肝心なのは、これら専門知識とは、自分だけが信じている主観的なものではなく、世の中で普遍的に通用する客観的なものだということだ。つまり専門知識はあくまで「客観世界」のなかの存在に他ならない。換言すると、ある知識命題を誰が解釈しようと同じだということになる。

(中略)

一方、専門分化が異様なまでに進んだ現代の社会では、専門知の制度疲労が心配されることになる。専門知の洗練はローカルな進歩を生むものの、専門家は狭いタコツボのなかで暮らし、他分野の活動を学ぶ余裕がないので、自分の分野で規範とされる発想を相対化することが難しい。しかし、社会は流動しており、都市、環境、医療、エネルギーなどの現実の大問題は、たくさんの分野にまたがる複合的な性格をもつ場合がほとんどである。したがって、単一分野の専門家では歯が立たない。3.11 東日本大震災以降の原発事故収拾をめぐる迷走ぶりは、その好例といえる。

(2) アマチュアの知とは、上のような専門知の限界を補うためのものに他ならない。プロフェッショナルが既存のミクロな知識や局所的な前例にとらわれ、硬直した機械的・定型的判断をしがちなのに対し、アマチュアは自由な発想や健全な常識にもとづいて、マクロな全体的観点から問題解決への提案や発言をおこなえるからである。し

たがって、アマチュアの知とは、断片的・分析的な「知識指向」とはまさに正反対の、全体論的・包括的な「知恵指向」のものなのだ。それは、コンピュータを駆使した知識命題の論理的判断というより、むしろ身体や無意識からの判断や直感にもとづいて、生命活動の活性化や安全性向上をめざすのである。

【出典】西垣 通『ネット社会の「正義」とは何か—集合知と新しい民主主義』

(KADOKAWA, 2014 年)

\* 出題にあたり、原文の縦書きを横書きにした。それにもとない漢字の一部を改めた。また小見出しを削除し、原文を一部省略した。

(注1) ウェブ2.0:

従来のウェブ・ページに加えてブログ、ツイッター、フェイスブックなどを利用することで、一般人が自由かつ容易にウェブ上で発言できる状態のこと。

(注2) 所与の:

あらかじめ与えられた、という意味。

## 設問1

傍線部(1)の問いかけ「いわゆる客観世界はいかにして出現したのだろうか」に対し、筆者は「間主観性」という概念を用いて答えている。「間主観性」とは何かを明らかにしながら、この問いかけへの筆者の答えを、わかりやすい表現を用いて200字以内で要約しなさい。

## 設問2

「専門知」に対する、傍線部(2)「アマチュアの知」の特徴について、筆者の見解をわかりやすい表現を用いてまとめたうえで、社会のさまざまな問題を解決するための「アマチュアの知」の活用法について、あなたの考えを600字以内で述べなさい。